

Shakespeare と Mannerism

小 島 信 之

序

Timon において極点に達したかにみえる Shakespeare の pessimism は、必ずしも作者一個の精神状況に止まらなかつた。Wylie Sypher も指摘しているように、⁽¹⁾ 16 世紀から 17 世紀へかけての西ヨーロッパは、鬱憂と不信の大浪によつて内部から震憾されていたのであつた。それは狭義の Renaissance (High Renaissance) の optimism が様々の反証によつて否定されようとする反動の一時期であつて、次に来る燦然たる baroque への過渡期、或は転形期に当り、芸術の分野では芸術史家によつて近来 “Mannerism” と呼ばれている特異な様式が発生した。それは、われわれが生きているこの現代との驚くべき相似によつて私の興味を著しく唆る現象である。

Mannerism といえば、わが国でも以前から使われている言葉であるが、それは、専ら、文学・美術の表現手段が型にはまつて固定化して、生氣を失っている状態を指す、という悪い意味に限られているようである。したがつて、“Shakespeare と Mannerism” という標題は誤解を招く虞れがあるので、先づ、ここに使う Mannerism という言葉の意味を厳密に現定して掛らねばならないかも知れない。しかし、これは上述のように芸術史の専門用語であつて、単なる抽象概念ではないのであるから、結局、この概念の規定は、同時に、芸術上その他の具体的な事象と相即して述べる他はないので、この言葉の真の意味の理解はこの小論の最後に（或はその過程に）把握して戴くほかはないであろう。

扱、Mannerism の芸術は危機の芸術であるといえよう。そこには安定した中心はもはや失われており、したがつて古典的な均整や調和の美は求めるべくもない。世界も人間も分裂して、一定の焦点に固着できず、一つの極から他の

極へと振動し、凄まじい嵐と怒号のうちに、ついに錯乱か自殺かの土壇場へと追いつめられていく。Hamlet の狂気は Mannerism の世界の住人にとって多かれ少かれ親しいものであつた。彼の沈鬱な瞑想と果敢な格斗、真面目な哲学とふざけた猥談、——どちらが真の Hamlet であるか。同じ Mannerism の詩人 John Donne もまた敬虔と猥褻の両極に分裂した気違いじみた人物であつた。彼のその調和を失つた乱脈な自己の姿は、また彼がその中に生きなければならなかつた時代の姿でもあつた。

And new philosophy calls all in doubt,
The Element of fire is quite put out;
The Sun is lost, and th' earth, and no mans wit
Can well direct him where he look for it...
'Tis all in peeces, all cohaerence gone;
All just supply, and all Relation...

...nor can the Sunne

Parfit a Circle, or maintaine his way
One inch direct; but where he rose to-day
He comes no more, but with a couzenivg line,
Steals by that point, and so in Serpentine...

...but yet confesse, in this

The worlds proportion disfigured is;
That those two legges whereon it doth rely,
Reward and punishment, are bent awry.
And, Oh, it can no more be questioned,
That beauties best, proportion, is dead.

(First Anniversary).

〔大意〕また新しい学問はすべてを疑つて呼び、火の要素は全く消えてしまつた。太陽は姿を消し、大地も無くなつた。それを何処に探すべきか。知恵はもはや人間を導きはしない。すべてはばらばらに粉碎し、ありとあらゆる統一は消滅した。すべての正しい供給も、またすべての関係も…はたまた太陽も完全な円を描かず、一時も真つ直ぐにその進路を進みもしなくなつた。そして今日昇つた所に、彼はもう二度とやつて来ず、まるで蛇のように、曲りくねつた曲線を描いてその場所に忍び寄る…しかもなお、告白すれば、この点にこそ世界の均衡は傷付いているのだ。人間の頼りにする二本の足、即ち報酬と刑罰は曲つて振れている。そして、ああ、最上の美、即ち均衡、の壊れてしまつていくことにもはや疑問の余地はない。〕

Renaissance の “new philosophy” は、Dante の‘神曲’に見る、あの Ptolemy の天文学を基礎にして築き上げられた中世の地球中心の整然たる緻密な宇宙像を根柢から揺すぶり始めていたが、High Renaissance の子である

Copernicus にとつてはこの宇宙はなお“神の作品にふさわしい運動と形態との驚嘆すべき均整と相互関係”であることを失いはしなかつた。しかし Mannerist である Hamlet にとつては、もはやそれは“a sterile promontory”（荒涼たる岩鼻）や“a foul and pestilent congregation of vapours”（穢らわしい毒気の集積）としか見えなくなっている。

...I have of late, but wherefore I know not, lost all my mirth, forgone all custom of exercises; and indeed it goes so heavily with my disposition, that this goodly frame the earth, seems to me a sterile promontory, this most excellent canopy the air, look you, this brave o'erhanging firmament, this majestical roof fretted with golden fire, why it appeareth nothing to me but a foul and pestilent congregation of vapours... (II. ii. 306—15).

（僕は近ごろ—どういう訳だかわからないが—すつかり陽気でなくなつて、いつもやつている運動も止めてしまつた。そして気分がひどく重つ苦しくなつたので、この美しい姿の大地が、僕にはまるで荒涼たる岩鼻のように見え、頭上を覆うこの素晴らしい大空、ねえ君、あの黄金の火をちりばめた荘厳な蒼穹も、つまりは穢らわしい毒気の集積としか思われぬのだ。）

Hamlet に次いで、*King Lear* に出てくる、Lear の娘達のように怪物的な息子を持つた Gloucester は、

These late eclipses in the sun and moon portend no good to us :
(I.ii. 107—8)

（近頃の日蝕や月蝕はわれわれには不吉の兆だ）

と心配する。続けて彼は言う。

...though the wisdom of Nature can reason it thus and thus, yet Nature finds itself scourg'd by the sequent effects. Love cools, friendship falls off, brothers divide : in cities, mutinies; in countries, discord; in palaces, treason; and the bond crack'd 'twixt son and father. (108—13)

（…天地の理法を知るものは、それをこれこれの訳だと説明してはくれるが、天変があつた後には必ず人心も乱れるものだ。愛情は冷却し、友情は無くなり、兄弟は仲違いし、都会には暴動、田舎には不和、宮中には叛乱が起り、父子の絆もぶつつりと切れる。）

また彼は、述懐して次のように言う。

We have seen the best of our time : machinations, hollowness, treachery, and all ruinous disorders follow us disquietly to our graves. (116—20)

(昔はよかつた、今は末世だ、陰謀、輕薄、叛逆、そしてありとあらゆる破滅的な擾乱が、騒々しく墓場までもおれ達を追いかけてくる。)

Troilus and Cressida の世界もまた同じ不協和の破滅的な様相を呈している。
Ulysses の有名な ‘degree speech’ は、既に、嘗ての美しい秩序がすっかり壊れてしまっている現実の地獄絵を抽象的に写生しているのである。

Troy, yet upon his basis, had been down,
And the great Hector's sword had lack'd a master,
But for these instances:
The speciality of rule hath been neglected;
And look how many Grecian tents do stand
Hollow upon this plain, so many hollow factions.
When that the general is not like the hive,
To whom the foragers shall all repair,
What honey is expected? Degree being vizarded,
Th'unworthiest shows us fairly in the mask.
The heavens themselves, the planet, and this centre,
Observe degree, priority, and place,
Institute, course, proportion, season, form,
Office, and custom, in all line of order;
And therefore is the glorious planet Sol
In noble eminence enthron'd and spher'd
Amidst the other, whose med'cinable eye
Corrects the ill aspects of planets evil,
And posts, like the commandment of a king,
Sans check, to good and bad. But when the planets
In evil mixture to disorder wander,
What plagues and what portents, what mutiny,
What raging of the sea, shaking of earth,
Commotion in the winds! Frights, changes, horrors,
Divert and crack, rend and deracinate,
The unity and married calm of states
Quite from their fixture! O, when degree is shak'd,
Which is the ladder of all high designs,
The enterprise is sick! How could communities,
Peaceful commerce from dividable shores,
The primogenity and due of birth,
Prerogative of age, crowns, sceptres, laurels,
But by degree, stand in authentic place?
Take but degree away, untune what string,
And hark what discord follows! Each
In mere oppugnancy: the bounded waters
Should lift their bosoms higher than the shores,
And make a sop of all this solid globe;
Strength should be lord of imbecility,

And the rude should strike his father dead ;
Force should be right; or, rather, right and wrong—
Between whose endless jar justice resides—
Should lose their names, and so should justice too.
Then everything includes itslef in power,
Power into will, will into appetie ;
And appetite, an universal wolf,
So doubly seconded with will and power,
Must make perforce an universal prey,
And last eat up himself.

(I.iii. 75—124).

(そもそもトロイがまだ破壊されず、大ヘクターの剣が、その主を失うに至らない所以は、思うにこういう原因からなのです。つまり、全軍を統率すべき主権が、等閑に附せられているからなのです。御覧なさい、この平野にあるわがギリシャ軍の陣営の多くは空虚も同然です。即ち、有れども無きに等しい徒党です。総大将が、いわば全軍の蜂の巣であつて、働き蜂が、みんなそこへ集まるようになつていないで、どうして蜂蜜が出来ましょうか。たとえば仮面舞踏会で、高位の人びとまでが、仮面をかぶつていた日には、最劣等の者との見境もつかないではありませんか。天体そのものでも、いや、惑星でも、この地球でも、いやしくも正しく運行しようとする場合には、ちゃんと階級、前後、位置、規律、方針を遵守しています。したがつて、かの赫々たる太陽の玉座は諸々の天体の間に昂然と高く且つ円満に据え設けられていて、その医力に富む眼光は、常に邪悪な惑星どもの有害な感化を矯正すると同時に、ちようど国王の嚴命のように、何んの障碍もなく、善にも悪にも及ぶのです。しかし、もし右の惑星どもが、邪しまに連合して、秩序がすっかり乱れてしまうと、種々の悪疫が発生したり、様々な兇兆が現われて来ます。擾乱が始まり、海は荒れ、地は震い、嵐が吹き起る。脅威や変動や恐怖が今まで統一され和合していた国々の平穩を砕き、裂き、覆し、根こそぎにし、全く平和を失わせてしまいます。ああ、凡そ段階というものは、すべての高大な計画を達成するための梯子であるのに、それが役に立たなくなつては、とうてい成果は挙げません。社会でも、学校でも、都市でも、いや諸国を区劃する諸海浜の貿易でも、長子権でも、或いはまた高令、王冠、王笏、月桂冠等、またその特権でも、もし段階がなかつたなら、どうして確実な地位を保つことが出来ましょうか。ただその段階を取り去つたばかりで、即ち、その一絃の調子が狂つたばかりで、どうでしょう、全体が乱調子になつてしまいます。何もかもが、すべて衝突し、軋轢し、納まつていた太洋はあらゆる海岸に汎濫して、この地球全部を水浸しにする。暴力が弱者の君主になり、不孝者が父親を殴り殺し、腕力が権力となる、いや、むしろ、正邪善悪はその名を失い、その果しない闘争を裁くべき正義そのものが滅びてしまう。そうすると一切が力に包括され、力は我意に、我意は

我慾に帰着する。こんどは我慾は我意と力とを二重の後楯として、狼のように猛り立つて一切をその餌食にし、結局は己れ自身をも啖い尽してしまうでしよう。

Hamlet の住んでいる世界には “something rotten”⁽²⁾ (何か臭つたところ) がある。この “sweet prince” は “重つ苦しい” 憂鬱な気分 に 陥っている。彼の心は “taint”⁽³⁾ (毒に冒) されている。彼は Ophelia に告白して、

...I am very proud, revengeful, ambitious, with more offences at my beck, than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them in. (III.i. 126—29)

(僕は太へん高慢で、執念深く、野心が強く、たくさんの罪が、考えにまともたり、形を想像したり、実行する余裕もないほど夥しく、いざといえはすぐ僕の意のままになるのだ)

と言う。彼はある “vicious mole of nature”⁽⁴⁾ (生れつきの汚点) に悩んでいる。それは、それが嵩じると “breaking down the pales and forts of reason”⁽⁵⁾ (理性の柵や砦を打ち壊す) ような性癖である。墓場で彼は瞑想する、——女が一時の厚さに白粉を塗つても、結局は Alexander 大王と同じように塵に化して、酒樽の栓にする他に役立たないものになつてしまう、と。Hamlet の心は病んでいる。そして、人生嫌厭の余り、しばしば自殺の思いに駆り立てられる。彼は中世後期の暗い死の観念に取り憑かれているようである。そしてまた Mannerism の画家 Tintoretto や El Greco の絵にも Totentanz (死の舞踏) を踊っているような骸骨めいた奇怪な形象が姿を現わしている。Shakespeare の同じ Mannerism に属する異様な劇 *Measure for Measure* の “prentie sinner” (取りすました罪人) である Angelo も Hamlet と共に “that way to temptation where prayers cross”⁽⁶⁾ (祈願が直面する誘惑への道) を進んで行く。この不安定な世界においては、 “quite athwart goes all decorum”⁽⁷⁾ (あらゆる端正なものは醜くく歪んでいる) のである。

(未完)

- 註 (1) Wylie Sypher, *Four Stages of Renaissance Style*, New york, 1955, P. 100.
- (2) *Hamlet*, I. iv. 90.
- (3) *Ibid.*, I. v. 85.
- (4) *Ibid.*, I. iv. 24.
- (5) *Ibid.*, I. iv. 27-8.
- (6) *Measure for Measure*, II. ii. 159.
- (7) *Ibid.*, I. iii. 31.